父よ、わたしの霊を御手にゆだねます

イエス様の十字架の場面を取り上げるのも、4 回目になりました。これまでマルコ、マタイの十字架の場面を説教で取り上げ、先週からルカによる福音書の十字架の場面を取り上げています。先週は 26～43 節の、イエス様が十字架につけられる場面を聖書個所に取り上げました。今週はイエス様が十字架上で息を引き取られる 44～49 節を取り上げます。そこにはどんなことが記されていて、どんなメッセージが私たちに投げかけられているでしょうか。一つひとつ見ていきましょう。

ルカによる福音書 44～49 節。そこには息を引き取る際に発せられたイエス様の言葉が記されています。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」。このイエス様の御言葉について、私はある時まで静かな御声を想像していました。それは、私も牧師として息を引き取る方を見守った経験があったからです。皆さんの中にも誰かの臨終を看取った経験のある方がおられるかもしれません。息を引き取られる方は呼吸がだんだんと穏やかになり、弱くなり、終いにはすうっと亡くなっていかれます。そうした経験から、私もイエス様の最期について、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という葛藤はあったものの、最期は小さな声で囁くように「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と仰られて、神様にすべてをお委ねして亡くなっていかれたのだと思っていたのです。

しかし、今日の聖書個所をよく読むと、イエス様は「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という言葉を「大声で叫ばれ」て亡くなっていかれたのでした。死の直前、もうほとんど力も残っていなかったでしょう。それでもあらゆる力を振り絞り、イエス様がこの最期の一言を大声で発されたことを聖書ははっきりと記しています。

では、なぜイエス様は最期、この言葉を大声で叫ばれたのでしょう。実はイエス様がお叫びになった「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という言葉は、詩編 31：６の御言葉に他なりません。そもそも詩編というものは常に祈りの言葉として用いら

れていたもので、この詩編31編もユダヤ人にとって夕べの祈り、あるいは一日の業を終えて床に就く時の祈りとしてしばしば口にされていた詩編の一つだと言われています。ですから、イエス様にとっては非常になじみのある御言葉だったのです。

詩編31編にはこう記されています。「主よ、御もとに身を寄せます。／とこしえに恥に落とすことなく／恵みの御業によってわたしを助けてください。／あなたの耳をわたしに傾け／急いでわたしを救い出してください。／砦の岩、城砦となってお救いください。／あなたはわたしの大岩、わたしの砦。／御名にふさわしく、わたしを守り導き／隠された網に落ちたわたしを引き出してください。／あなたはわたしの砦。／まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。／わたしを贖ってください。」

加藤常昭先生があるご本の中で紹介しておられたことですが、ある人がこの詩編を講解した時に、詩編そのものに「驚くべき恵み」という表題を付けたそうです。その理由はこの詩編の終わり近く、22節以下にこのように歌われているからに他なりません。「主をたたえよ。／主は驚くべき慈しみの御業を／都が包囲されたとき、示してくださいました。／恐怖に襲われて、わたしは言いました／『御目の前から断たれた』と。／それでもなお、あなたに向かうわたしの叫びを／嘆き祈るわたしの声を／あなたは聞いてくださいました。」

加藤先生は言います。「『驚くべき恵み』という表題が生まれた理由は、ここにある『驚くべき慈しみの御業』という表現によると見ることもできよう」と。「自分が住んでいた都、神の民の都が敵に包囲されてしまった。もう逃げ道もない。死の恐怖、滅びの恐怖が迫る。それは自分が神のまなざしから失われたかと思う恐怖でもある。あなたの目の前から断たれた。神との絆が断たれた。せっぱ詰まってしまっている。この包囲された者の感覚は私たちにもよくわかる。肉体の病、精神の窮迫、さまざまな生活上の危機、悪魔の包囲を受けたかと怖じ惑う霊的危機、もはや『叫び』としか言えないような祈りの声が神に向けられる。包囲された者の無力感が全存在に染み透る。まさにそういうときに神を呼ぶ叫びが生まれる」。その叫び、「助けてください。救い

出してください。お救いください。引き出してください」という心からの叫びを神様が見捨てることなく聞いてくださった。詩編 31 編はその恵み、「驚くべき慈しみの御業」の恵みを高らかに歌い上げた詩編なのです。

加藤先生は続けて言います。「十字架の上の主イエスもまた包囲されておられる。『御目の前から断たれた』という言葉は、『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』という叫びと重なる。どこに突破口が開けてくるのだろうか。主イエスはそこでまた詩編の言葉を用いられたのであろうか。『父よ、わたしの霊を御手にゆだねます』と言われたのである。これが最後の言葉になった。最後の言葉になったということは、主イエスはこの神への祈りによって、遂に包囲陣を突破されたということではないであろうか。」

加藤先生のこうした言葉から伺えるのは、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と詩編 31 編の御言葉を大声で叫んで息を引き取られたイエス様は、最後の最後まで戦っておられたということです。御手にゆだねるというのは、戦いの言葉だったのです。それは私たちのための戦いに他なりません。暗闇が覆うこの世界のための戦いです。イエス様は最期の力を振り絞りながら、私たちのために戦い抜いてくださった。そして遂にこの世の罪の包囲陣を突破して、私たちの罪の贖い、救いを成し遂げてくださったのです。

私はイエス様のこのお姿、十字架という絶望に包囲された状況の中でなお「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と、決して私たちをお見捨てにならない神様の介入を信じて、大声で叫ばれてこの世の罪と戦い抜かれたイエス様のお姿から私たちの生き方と死に方を学んでいきたいと願います。

ローマの信徒への手紙 14：7～8 に記されているパウロの言葉をお読みしましょう。そこには次のように記されています。「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、

死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」

　このパウロの言葉を読むにつけ、自分の命は自分の所有物だと思い込んでいる私たちの傲慢さに気づかされます。自分の命、自分の日々、自分の人生、それは自分のものだから自分の自由にして構わない。その代わり、人生に何かあった時には自分で何とかしようと躍起になる。裏を返せば、自分こそ自分の命の主であり、自分一人で自分の命を守れると勘違いしながら生きているということです。

　しかし、パウロは言います。「生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」と。この言葉を語ったパウロの時代、また彼の人生がどのようなものであったかは使徒言行録や彼の手紙を読めばその一端を垣間見ることができます。

　ユダヤ教からの迫害があり、ローマ帝国からの迫害も予感される、実際彼は 64 年のローマでの大火の後、皇帝ネロが行ったキリスト教徒への迫害の中で殉教したと言われていますが、そんな中でパウロは自らの生涯を宣教にかけました。コリントの信徒への手紙二 11：23～28 にはそこで経験した苦労、艱難がリストにして記されています。「苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。しばしば旅をし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、苦労し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渇き、しばしば食べずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このほかにもまだあるが、その上に、日々わたしに迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事があります。」

　このような中で、それでもパウロはイエス様とともに何度も何度も祈ったことでしょう。「助けてください。救い出してください。父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」

と。

やがてパウロの時代からさらに時代が進むにつれて、キリスト教徒への迫害も厳しくなっていきます。その頃の教会には自分たちの礼拝堂などありませんでした。公に礼拝堂に集まれば、そのことで捕らえられてしまうからです。そこである地域では、礼拝堂の代わりに地下墳墓、おそらく仲間のキリスト者たちがその肉体のまま葬られた墓を、皆の集いの場所にしたそうです。仲間の棺の上に布をかけて、それを聖餐テーブルにしたそうです。そこでも、人々はイエス様の最後の声に自分たちの声を重ねて祈り続けたことでしょう。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と。

このように代々の聖徒たちは、その人生の中、自らを取り巻く絶望のような状況の中で、それでも自らの命は主のものであると信じ、イエス様と共に、自分では守り切れない命をすべて父なる神様にお委ねしました。イエス様がその後神様に蘇らされたように、神様が、父なる神様が、この世界に、私たちの人生に介入してきてくださる。何かを始めてくださる。そのように信じて、不安も恐れもそのまま神様のもとに全部投げ捨てて平安を受け取り直し、穏やかなほほえみを浮かべながら主のために生き、主のために死ぬ人生を描き直していったのです。

今の私たちもこの信仰をしっかりと受け継いでいきたいと願います。私たちの人生においても、何度も何度も苦難が襲ってくることでしょう。それを傲慢にも自分の力だけで解決しようとすると無理が生じます。決して私たちをお見捨てにならない神様の介入を信じて、この世の罪と戦い抜かれた十字架の主と共に、また代々の聖徒と共に「助けてください。救い出してください。父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と叫べばよいのです。そして、神様を待つところから主のための人生を描き直していけばいい。

今からおよそ 2000 年前に、イエス様は十字架の上で私たちに絶望との戦いの言葉を授けてくださいました。そして自らの復活を通して、その戦いの先に必ず希望があ

ることを示してくださいました。この世界は私たちの力が尽きたところで滅びていく世界では決してありません。どのような時も、「助けてください。救い出してください。父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」と祈りつつ、神様から平安を受け取り直していきたい。そして折れない心で、主のための人生を力強く歩んで参りたいと存じます。

祈りましょう。　　――以下、祈祷――